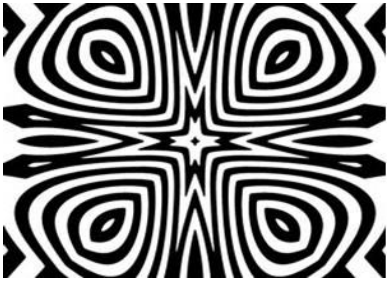
妄想日記

高岡 啓次郎



販売が落ち込む一方の月刊誌に勤めている筆者は三月の年度末までに起死回生の記事を書いてこいと言われた。大幅に人員を削減する話も出ており、外部的にも内部的にも、うかうかしてはいられない。そこで選んだテーマは妄想だった。現代病のひとつは『自分が分からなくなる』ことであり、そのことに妄想が絡んでいるとにらんだからだが、ここに実例を紹介して読者にも一考を願いたいものである。記事は本人の日記や手記、知人とのメールなどを可能な限り参照させてもらい、知り得た断片的な情報をつなぎ合わせている。事実を土台にしているが、プライベートな部分や取材の及ばない部分には多少のフィクションを挟んでいることをご理解願いたい。

月刊風聞　高浜慎太郎

①　四ノ宮ナオミの場合

九月八日

中島裕之助か、いい響きの名前ね。さも将来がありそうな感じがする。今日もまた私のことを見ていたわ。苦手な英語の授業が楽しくなってきた。歳は幾つくらいなのかな。見たところ三十前後のはず。あの若さで女子大の客員講師をしているんだから相当に優秀なんだろうな。つまんない学生生活だと思っていたけれど。新学期に入ってから面白くなってき

たわ。

ちょっと痩せているし、そのへんのおじさんみたいに髪型も七三に分けて芸がない感じだけど、よく見たら、なかなかイケメンじゃん。それにしても、あんなに大勢の学生がいるのに私ばかり見るのはどうしてなんだろう。――なこと言ってみたけど、本当は分かってるんだ。きっと私に一目惚れしたのよ。あんな人と結婚するのも悪くないかもしれない。昨日フェイスブックを開いてみたら慶応を出ているのね。趣味はオペラ鑑賞とヨットだという。なんとゴージャス！　アメージング！

九月十日

私の家系が京都の有名な公家だったというのは周囲に内緒にしているの。何でも天皇家とは深いつながりがあったらしい。時代が時代なら私はこんな所にはいないはず。周りのクラスメートの中には、さも自分が家柄のいい家の娘であることを鼻にかけているのが何人もいる。一人は大物政治家が伯父さんに当たるとか。それが何だっていうのよ。どうせ政治家なんか落選したら普通の失業者と変わりないじゃん。医者の娘も二人いるというけど、見てくれも頭の構造もどうってことない。医者だって金の力でなった人がわんさかいるんだから、威張れるものじゃないわ。

それに昨今の患者の奪い合いはどう？　芸能人やら、有名スポーツ選手やら、そういう人が入院したときは病院を上げて大歓迎し、それとなく宣伝して病院の知名度を高めようとするわね。それでいて急患なんかでかつぎこまれた普通の人を、うちは現在手一杯でございますとか何とか言って見向きもしないことがある。あーいやだ。救命の看板を掲げながら人の命に値段を付けているんだから。

その点、私はもっと血筋がいいの。今に見ていたらいいわ。私のことに気がついたら、びっくりするだろうな。それと、正規の教授になったときに合わせて中島裕之助が私にプロポーズしたら、ちょっと返事をはぐらかして、公家の血筋の奥ゆかしさを出してやるわ。まあ、それも見せかけの謙遜にすぎないけれど、がつがつと餌に食いつくような品位のないことはしたくない。三日間はあれこれと逡巡したように見せかけて首を静かに縦にふってやるわ。

九月十三日

今日、裕之助ったら、廊下ですれ違ったときに知らないふりをした。わざと視線をはずしてこちらを見ようとしないの。案外恥ずかしがりやみたいだ。その理由は分かっている。周囲に他の学生たちがいたからよね。そうでなければ、きっと私に近づいて耳元で言うに違いないわ。

「よろしければ、ぼくと付き合っていただけませんか。講義をしているときも、貴女ばかりを見ていました。きっとお気づきのことと思います」

きゃあ、どうしよう。だめだめ。さりげなく下を見るの。

もちろん気付いていたけれど、知らないふりをするわ。それから恥ずかしそうに一歩後ろに下がって言うのよ。
「学業が忙しいものですから、わたくしにはとても無理ですわ」
昔風の言い方で、あくまでも奥ゆかしく。
裕之助はきっと私の隠れた高貴さに気付いたのね。だから圧倒されて私ばかりを見るのでしょう。
「貴女さまは、こんな古くさい校舎の中にいらっしゃるような方ではありません。いずれは全てが明らかになり、貴女にお近づきになることは光栄のいたりであることを全員が知ることになるでしょう」
「そのことはどうか内密にして下さいな。周囲がわたくしを特別扱いしたら困りますから」
てなことを言ってやろう。おそらく裕之助はますます舞い上がって、私のとりこになってしまうはず。ああ、どうしよう。デートに応じるときは何を着て行こうかしら。

九月十六日

次の授業で裕之助がまた私のことを見たらウインクしてあげようかな。いつもそっけなくしていたら可哀そうだもの。住まいはどこなのかな。今度、授業が終わったら待ち伏せて後をつけてみようかしら。どんな生活をしているかを知れば、結婚してから私ができることが事前に分かるかもしれないもの。どこかのシャレたマンションだろうか。ヨットを持っているというから大きな屋敷でご両親も一緒かもしれない。
親がどういう人かを知るのは絶対に必要だわ。どんな政治理念を持っているか。好きな映画や芸能人は誰かを知るのも無駄にはならない。裕之助はオペラが好きだというから、親たちも高尚な音楽が趣味かもしれないわね。それが分かれば事前に私は下調べを怠らないようにする。テーブルトークのときに、さも恥ずかしそうに溢れる知識を小出しにしてやろう。ぜんぜん分からないのですが、と必ず前置きしてから。
そんなことよりもっと重要なことがある。もし何かの宗教に熱心なら、私は事前にリサーチしてそれとなく信者になるの。蛇を拝む宗教以外なら何でもいいわ。偶然を装って、「自らの魂の救済のため、自分自身を探すために参りましたの」とか何とか言って門を叩き、「今どきの若い女性にしては何と見上げた心がけだろう」と教祖さまに感じてもらえるように自分を売り込んでやるわ。
あとから裕之助の家に招かれたときに「あら、まあ、何という奇遇なめぐり合わせでしょう。こんなことってあるんですのね」そう言ってやろう。父親でも母親でもいい。どちらかを強力な味方に付けたらしめたもの。きっと私を一族に迎え入れることを歓迎するでしょう。そうすることが神さま仏さま、主(ぬし)さまのおぼしめしだと思うだろうな。そのとき、私がかつて天皇家と深いゆかりのある家系の娘だと誰からともなく知れ渡り、こぞって祝福するに違いないわ。ああ、楽しみ。

後日談

このあと四ノ宮ナオミは、中島裕之助につきまとい、ストーカーとして訴えられ、女子大を退学処分になった。最近になって彼女を見かけた人が数人いるが、パジャマ姿のまま外を歩いていたり、急に着飾って自分と天皇家のつながりを誰でもおかまいなしに語ったりしているという。先月から母親に付き添われて、都内の病院でカウンセリングを受け始めたから回復を祈りたい。エロトマニアと言われる『恋愛妄想』はいつの時代でも人の心につきまとう。それはあらゆる芸術のモチーフになるが、現実世界においては困った問題と言えるだろう。それと『血統妄想』だが、自分の血筋について、たとえ不確かな情報であったとしても、それを過度に信じ込むと、胸に宿るプライドがその人を支えることもあれば、時代錯誤の行動にもつながりかねないから厄介だ。

② 宮沢健三の場合

俺は日付を書くのが嫌いだ。そんなのは意味がない。俺にとって、時間は関係ないのだ。自らの深淵なる意識の流れを記すのに、日付など価値はないからだ。過去も現在も未来も、俺にとっては同じもの。宇宙の中のほんの気まぐれな微動でしかないからだ。

俺が今年の春にN大学の哲学科の准教授になれたのは当然のことであり、隠しきれない才能と能力を、やっと周囲が認めた結果だろう。五十五歳という年齢からしたら遅すぎたが、業績の裏付けを作れば近々のうちに教授の声もかかるに違いない。同じ大学を出て、数学の才能で認められた北山は俺より五年も早く准教授になり次期教授の席には一番近いと言われているようだが、どっこい、そうはいくものか。その前にこっちがなってやる。あいつの頭がすっかりはげたのは、何やら訳の分からない数式のとりこになっているからだろう。

以前は素数に関する論文で認められたというが、あれからやつは何を研究しているのだろう。ガロア理論だとか、ＡＢＣ予想だとか、訳の分からないことをつぶやいていたが、きっとたいした成果は出ていないように見受けられる。焦るなよ。のんびりやれ。最近あいつを見ていると首がふるえているな。まだ若いのに気の毒なことだ。頭の使い過ぎはよくないぞ。観照生活という言葉をこんど教えてやろうかな。古代ギリシャ人の考えで、分かりやすく言えば、こせこせと走り回ってばかりいないで、ゆっくりのんびり生きろということだ。

しめた。しめたぞ。神田の古書店を朝から回っていたが、たまにはいいことがある。古いシェストフの本を見つけたぞ。しかし収穫はそれではない。ページのいたるところに誰かの

走り書きがたくさんあるのだ。そこに出ている考えは実に斬新で個性的だ。俺が知る限り、この種の考えを発表したやつはいないはずだ。かなり古いものだな。本は昭和二六年のもので、書き込まれたインクもすっかり色を変えたりにじんだりしている。そうとうの歳になっているか、おそらくこの世にいないかもしれない。

ならば好都合じゃないか。この哲学理論をいただいてしまおう。なあに、表現を少し変えれば問題ないはずだ。ひとときの世界中の若者をとらえた実存主義を全部ひっくりかえす新しい考えだ。ようするに人間は夢の中で真実の姿を現すというわけだ。胡蝶の夢ではないが、俺たちの現実世界の方が、誰かの見ている夢なのだ。この分野で持論も展開し華々しくデビューしてみせる。

しばらく日記を書くひまがなかった。新しい論文にかかりっきりになっていたからだ。俺は古本の間から見つけた考えを発展させて革命的な哲学論を構築できた。思えばあれは天の助けだった。神田の町を歩き回り、かび臭い書店を何軒も歩いた。雨が降り出したが俺は満足できずに神田橋の近くにあるボロボロの本屋に入ったのだ。

あれからも俺は発表された哲学論文をくまなく調べたのだが、やはり誰も書いていなかった。あれは俺が世の中に発表する使命をになっていたからだろう。どんなにすぐれた台本があっても役者がお粗末なら見向きもされないのと同じだ。俺がその適役だったということだろう。今月中に完成させて世間の研究者をあっと言わせてやるぞ。

教授になれたら俺をひごろからバカにしている部分がある女房も少しは見直すだろう。学校が提供してくれている古くさい官舎からもおさらばだ。田園調布あたりに中古でいいから垣根をめぐらした家を買って、それこそ晩年は、人もうらやむ観照生活をしてやろう。俺は長生きの家系だから九十くらいは楽に生きるはずだ。哲学は歳を取るほど味が出ると言われているから、俺もそうなれる気がする。

後日談

宮沢健三が発表した論文が、哲学の分野ではない、夢について研究した二十年前に書かれた病理学の本からの盗用であるとされた。彼は大学を追われ、失意のうちに新しい職を探していたが、一昨年の冬に妻にも去られ、その心労がたたって亡くなってしまった。享年五十七歳の若さだった。

③　藤波裕太の場合

憎らしい。あいつが男にもてるのは知っていたが、俺と付き合っているのに平気で他のやつと親しくする。つい最近、横浜駅裏にあるスポーツクラブでテニスを習い始めたようだ

が、妙に熱心だ。以前なら俺とのデートを優先していたくせに、何があってもレッスンを欠かさない。雨の日も風の日も、どんなに忙しくても休まないから、その熱心さにはいささか嫉妬を感じないではいられないのだ。

なぜなら俺は何度か覗きに行ったことがある。インストラクターがめちゃくちゃイケメンの男だった。あいつより十歳は若いと思われる。筋肉質で背が高く、浅黒い肌は男の色気をむんむんさせている。じっと陰から見ていたが、楽しそうに会話したり笑ったりしているさまは、俺の前でも見せないほどの魅惑的な女の顔になっていた。ときどき男はあいつの肩に触れたり、腰に手を回したりして動きを指導していた。俺は思わず体が震えてきた。強く握った拳の指があとでしびれたくらいだ。仕事を含めて、たいがいのストレスにはめっぽう強いと自負する俺だが、心臓は鼓動を速めていたし、胃はむかつくし、体中の筋肉が固まったみたいになった。

ははあ、これだと俺は思った。こいつに会いたくて熱心に通っているに相違ない。頭に来る。あんな若い男とひっつくように過ごしているなんて耐えられない。外面的にはどこから見ても男は俺より優れて見える。悔しいがそれは動かしようがない。あいつは嘘つきだ。私は顔や容姿はまったく興味がないの、とか何とか言っていたが、あれは嘘もいいところだ。前に付き合っていたという男たちの様子を聞くと、どいつも美男俳優や人気歌手に似た男ばかりなのだ。しかも決まって背丈は一八〇センチ以上だったという。見たところ、このインストラクターもそうだ。一六〇センチしかない俺は、それに比べたらひどいチビではないか。

憎らしいのは家柄もすこぶるいいということだ。俺は平気な顔を装って詳しく聞いてみた。それによれば一部上場の某ビール会社の次男で早稲田卒の独身だという。三〇代後半で、金もあり、職業柄、女の生徒には申し分なくもてるだろうから、このままでいたら盗られてしまいそうだ。いや、もしかしたらもう遅いのかもしれない。

そう思った俺は何とか阻止してやろうと考えた。いまいましい想いで胸を焦がしながら向かった先は海辺にあるラブホテル街だった。横浜の港を一望できるドリームサイドはあいつのお気に入りだ。もしインストラクターとやる気なら必ず利用するのはあそこに違いない。なぜその日に見張ったかといえば理由がある。スポーツクラブが休みの日であり、朝からあいつへのラインが既読にならないからだ。きっと一緒に出かけているのだと考えて午前中びっしり張り付いていた。

何台もの車が出て行ったが、あいつの乗った車はなかった。午後に来るのだろうか。そう思ったが、急に自分のしていることがバカらしく思えてきたので仕事に戻った。いくら営業マンで自由がきくとはいえ、いちおう報告は所長に入れなければならないし、たとえ売れなくても何人かの客に試乗させてやったくらいのことは言わないと、今月中にあと二台の車を売るように言われている者としては言い訳がとぼしい。必死で努力しているように見せかけないとボーナスの査定にも

響くのだ。
　しかし仕事に戻ってからも頭の中はあいつのことばかりで、若い男と白蛇みたいに絡み合っている影像ばかりが頭にちらついてどうにもならなかった。諦めてなるものか。あんないい女には二度と巡り会えない。やすやすと手放すものか。確か男の住むマンションはスポーツクラブが入っているビルの裏だったはずだ。郵便ポストを見れば部屋番号は分かるだろう。夕方までそこで見張ってやろうか。なんならいきなりインターホンを押してみようかな。あいつがいないならそれでいい。男だけなら堂々と車のセールスをしてやろう。
　そうだ、それがいい。何回か通って、もし部屋に入るチャンスでもあればつぶさに観察してやろう。女が出入りしていたら必ず痕跡が残っているはずだ。その中にあいつが来ていた証拠でもあれば絶対に許すものか。俺の女に手を出すなと言い渡して袋だたきにしてやる。
　ああ、狂いそうだ。
　仕事も手につかない。
　食欲もない。
　夜も眠れない。
　どうしたらいい。
　俺はこのままでいたら変になってしまう。

後日談

　この日記風の手記を残した藤波裕太は、現在戸塚にある警察署に留置されている。刑は確定していないが、傷害事件の現行犯で捕まったとなれば有罪は間違いない。相手は車のレンチで激しく殴打されたあげく自宅マンションの階段から突き落とされて半身不随になった。そのことを考えると、かなり重い実刑は免れ得ないだろう。当然ながら会社も解雇されたし親兄弟からも縁を切られたという。だが、ひとつだけ救いなのは、藤波が付き合っていた彼女が、数日おきに面会に来て彼を励ましていることだろう。犯罪の動機は激しい嫉妬によるものらしいが、彼女にはすべて身に覚えのないことであり、どうしてあんな凶行にでたのかは思い当たらないと、取材を申し込んだ記者に話していた。インストラクターとはレッスン以外で話したこともなく、恋愛対象とはまったく考えられないとも語ったようだ。

④　スージー・山岸・ストリングスの場合

　この人は日記や手記を残さなかった。筆者は彼女が日本にいるあいだに住んでいた金沢を訪ねて人づてに取材を試みた。最初に向かったのは彼女が英語の教師をしていたという私立の高校だった。そこで何人かの教師から証言が得られた。ここには筆者が私情を加えずに聞いたままの順番で記したいと思う。真意を分かりやすくするために一部を省略したり不適

切な表現を言い換えたりした部分があることをご承知願いたい。

「とても優秀な先生でしたよ。シドニー大学をトップの成績で卒業した人で五カ国語を自在にあやつれるんです。音楽や絵の才能もあって、誰もが眩しい目で見ていたのではないでしょうか。私は教頭として三年間を過ごさせてもらいましたが、あんな事件を起こすなんて信じられません。被害者のケガが軽かったのは何よりです。あまりにもストイック過ぎる性格的なものでしょうか。睡眠不足が続いていたという話は耳に入っていました。今は富山の病院にいますが、警察の許可がなければ面会はかなわないそうです。同僚の女の先生が親しくしていましたから細かいことは聞いてみて下さい。それと、ひとつだけお約束願いたいのですが、これを記事にする前にゲラを見せていただきたいのです。前にも一部の週刊誌に事実を曲げて書かれて大変な目に遭ったことがありますから、それだけは了解して下さい。学年主任をしている桂木先生を呼びましょう」

「私とスージーは彼女が来てすぐに仲良くなりました。あの美貌と才能ですから、生徒たちにはとても人気がありました。憧れの対象となっていたと思います。教え子が何人もオーストラリアに語学留学しましたよ。とりわけ男性には人気がありました。どこかの店に一緒に入ってもほとんどの男の人は見ていましたね。私がこのとおりですから引き立て役ですよ。子どもでさえそうでしたし、腰の曲がったお爺さんでさえ眩しそうな視線を送っていましたね。うちの主人の友だちも例外ではありませんでした。ホームパーティーを開いたときに山岸浩一くんと知り合って、半年後には結婚したわけですから。

とても仲の良いカップルでしたよ。美男美女で、二人から生まれる子どもはどんなに美しい子になるだろうかと誰もが思ったのではないでしょうか。結婚してからもお互いの家をしょっちゅう行き来していました。うちの娘を可愛がってくれて、自分も早くベビーがほしいと話していました。それなのに山岸くんがイギリスに三ヶ月ほど仕事で赴任していて帰国してから二人の仲は変わってしまったんです。

さっぱり理由は分かりません。私にはなんどもラインや電話が来ました。言っていることが変なんです。イギリスから帰って来たのは浩一ではない。あれは別人だ。誰かが入れ替わっている。本人はどこかに監禁されているか殺されたに違いない。そう言うんです。どうしてそう思うのかと質問しても、はっきりしたことは言わないんです。夫婦の内密なことかもしれないので私もあまりつっこまずに、笑い飛ばしていました。まさか本気で悩んでいたなんて。警察でもあの人は夫ではないと言い張っているようです。精神鑑定をしているそうですが、うつ病みたいになっていて、その治療が優先されているようです。

果物ナイフは腕をかすめただけでしたから刑は軽いだろうと知り合いの弁護士も言っていました。彼女の弁護を頼みた

かったのですが、スージーが拒否したみたいで、国選の弁護人がついたそうです。浩一さんにはお姉さんがいて、スージーは何でも相談していたみたいですよ。同じマンションにいます。そこを見つけてくれたのもお姉さんでしたから。そちらからも聞いてみられたらどうでしょう」

「スージーは想像力の豊かな子でした。何を見ても、そこから夢やイマジネーションを広げていくところがあり、作家になったらいいのにと思ったことがありました。本を読んでは空想にふけり、詩のようなものを書いていたはずです。本の種類はさまざまですが、最近ずっと読んでいたものが、なんらかの影響を与えたのではないかと思ったりもします。裏社会といいますか、パラレルワールドというものがあるのだと熱心に語っていたことがあります。つまり私たちの住む世界とまったく同じで、鏡に映ったみたいな世界が存在していて、そこには自分とそっくりな人間がいて、同じような仕事につき、家庭を持っている。その二つの世界は普段は混じり合うことはないが、月食や日食、夏至や冬至などの天体現象によって入れ替わることがあるというのです。

だからディケンズが書いた『クリスマスキャロル』に、強欲のかたまりだったスクルージという人物が、クリスマスの夜に突然変わって同情心に富んだ人になる話があるが、あれは小説世界のことではなく、パラレルワールドから入れ替わったのだというわけです。他にもたくさん読んでいましたよ。私は笑いながら聞いていましたが、あまりにも熱心に語るので、そんなものかと思ったことがありました。

だから浩一がイギリスから帰って来てから、スージーが何かの変化を感じとって違う人間だと思ったのかもしれません。首に大きなアザがあったのですが、帰ってきたときにアザがなかったそうです。浩一が知人の紹介でもぐりの治療師に会い、消してもらったのだと説明しても信じようとしなかったようです。お風呂の中でも顕微鏡を覗くようにして体を見ては、いぶかしそうにしていたと聞いたとき、私は彼女が読んでいたものが影響したのではないかと感じました。

それにしても果物ナイフで突然切りつけるなんてどうかしています。事件を起こすひと月ほど前から眠れない日々をおくっていたようで、浩一が夜中に目を覚ますと、目の前で猛禽みたいに瞳をらんらんと見開いてスージーが見ていたことがあったといいますから、たぶん不眠状態が続いていたんじゃないでしょうか。確かに弟は話し方も少し変わりました。向こうで英語の特訓を受けていたせいでしょうか。イントネーションがヨーロッパ風になったんです。

それだって不自然ではないと思うのですが、スージーは違いました。いつも一緒に寝ていたのにベッドを共にすることはなくなったそうです。そうして仕事から帰ってくると、あなたは誰なのか。どうしてここに住んでいるのかと真面目に聞いてきたときにはぞっとしたと話していましたよ。事件のあとも言っていました。自分はスージーが治療を必要としていると思っている。早く出てきてストレスのない環境に移り、

眠れるようにしてあげたい。そのために腕のいい医者を見つけるつもりだとも話してしまった。私も早くそんな日が来ることを心から願っています」

後日談

翌年の春に執行猶予付きで三ヶ月の刑が確定し、それを終えたスージー・山岸はしばらく本国に帰っていたが、現在は再び日本に来て、長野県の上高地に移転して療養生活を送っているという。どんな本を読みたいかと山岸浩一が聞くと、相変わらずパラレルワールドに関わるものを読みたがるが、最近はときおり優しげな目で見つめることがあるという。自分が逆上のあまり刃物を振り回したことは心から反省しているが、夫が入れ替わった人間であるという考えは変わらないらしい。病理学では『カプグラ症候群』に入るようだが、『ソジーの錯覚』とも言われているという。そこで私は仮名を付けるときにわざと似せてみた。つい最近に手に入れた彼女の詩を紹介したい。それは美しくデザイン化された英語で書かれたものだが、直訳すると次のようなものとなる。

突然あらわれた人に私は二度目の恋をした。その人は私を愛していたという。私もそうなのだ。おとずれた新しい季節。そこに二人でいられる時は短いけれど、その刹那は永遠であり、私もまた生まれ変わってこの人を愛するだろう。

⑤　篠崎裕子の場合

家計簿に記された走り書きは日記の部類に入るだろう。ここにその抜粋を遺族の了解を得て掲載したい。三十年以上もこまめに付けていたようだが、ここには亡くなる少し前のものに絞ろうと思う。月々の光熱費や食費は今の時代感覚からすれば嘘だろうと思うくらい少ない。東日本大震災のあと、ひもじい生活をしばらく続けていた習慣が抜けなかったのだろうか。

海外から仙台に帰国した息子さんは取材の中で嘆いていた。七十歳の誕生日を祝ってから三年ぶりの帰国だったようだが、もっと早くに同居するべきだったと涙を流しながら答えていた姿が痛々しい。町内会長にも取材したが、しばらく話していなかったと言ったあと、体は痩せているのにお腹だけがずいぶんふくらんでいるのが不思議だったと話していた。

十二月二日

今日は二百五十六円も予算をオーバーしてしまった。卵も牛乳も、何もかも値上がりしているから仕方ないのだろうか。それでも明日は暖房を点けずに過ごし、おかずを我慢すれば何とかなる。そういえば月のはじめは町内会費を集めに来るはずだ。何もしてくれないんだから抜ける方がいい。わざと

居留守を使ってやる。払わないでいれば自然に抜けられるに違いない。ＮＨＫの人とは喧嘩した。あんなの払っていられるか。さっさと民営化してコマーシャルでも何でもやればいいんだ。民放ではできない番組を作るとかなんとか言ってるけど、今さら気取っていられるもんか。他社の番組で活躍している人気タレントやお笑い芸人を使って国民に迎合しているじゃないか。貧乏人が毎月二千円近くも払うのがどんなに大変なことか考えてほしいものだ。いっそ受信料反対の政党に入ってしまおうかな。でもやめた。顔がきらいだ。生理的に受け付けないわ。

十二月八日

ああ寒い。なんて寒いんだろう。こたつから出たら北極にいるみたいだわ。行ったことないけど、きっと似たようなものだと思う。窓ガラスの霜や氷を見たら分かる。日中も陽が差さないものだから少しも溶けないじゃないか。でもきれいだなあ。あの模様はなかなか芸術的だ。

広告会社にいる息子は、何とかデザインだかをやってるみたい。そうそうグラフィックデザインだ。どんなに頑張ったって自然が創り出す美には勝てないことを分かってほしいな。あの子は子どものころから人を上から目線で見る傾向があった。きっと職場でもそうだろう。敬子さんに出ていかれたみたいだけど、身から出た錆なんじゃないかな。しばらく顔を見ていない。デトロイトって寒いのだろうか。自動車に関わるデザインをしているらしいけど、私にはさっぱりわからない。ああ寒い。今日は布団に入らずにこのままこたつの中で寝てしまおうかな。

十二月二十四日

やだなあ。年末年始なんて大嫌い。クリスマスなんて商業主義が創り出したお祭りさ。私は外に出ないことにしている。どこの家にも子どもや孫たちが来てわいわいがやがや。私には関係ないわ。息子が嫁さんと別れてからはうちに寄りつかなくなったもの。あんなに可愛がったのに、二人の孫もさっぱりだ。電話くらいしてくれたってよさそうなものじゃないか。遊びに来たらお年玉くらいはケチらないよ。やだなあ。どのチャンネルを回してもお笑い芸人ばかりがのさばっている。静かな自然を描いた番組を探そう。あら、やっぱりＮＨＫじゃないか。お金を払っていないけどかまうもんか。三年前までは賑やかだった。息子の家族が一週間も泊まりに来ていた。疲れたけど、それなりに楽しかった。もうあんな日々は来ないのかな。これも運命だと思うより仕方がない。買い物にもいかないから在庫している漬け物と納豆で過ごしてみよう。かなり節約できる。そのうちテレビでやっている節約生活かなんかに取り上げられるかもしれない。それを息子や親戚が見たらどう思うだろうか。

後日談

家計簿への記帳はその日が最後だった。死体となって発見されたのは年明けの五日だった。いくら電話しても出ないことに心配した息子が隣町に住む従兄弟に連絡したのである。凍り付いた遺体は司法解剖された。死因は心筋梗塞によるものだった。寒中で暖房をつけずに暮らしていたことが心臓に負担をかけたと思われる。食べ物も極端に節約していたらしく、胃の中にはわずかな野菜と魚の残存物しか見つからなかった。奇妙なのは冷蔵庫にはびっしりと食料品がつまっており、戸棚や押し入れにも米や醤油、味噌、砂糖、缶詰などが何年分も保管されていたという。取材に応じてくれた息子が言うには、貯金通帳には二〇〇〇万円を超える残高があり、他にも有名製紙会社の株券が五万株も隠してあったというから、彼女がどうして貧乏神に取り憑かれたみたいな心理で生きてきたのか、誰もが首をひねるのだった。それと、彼女の異常にふくらんだお腹だが、それは肉ではなく腹巻きに常に隠していた現金であったというのは何とも驚きであり、それも一種の病的なものであったろうと筆者は推測する。妄想の中には『貧乏妄想』というジャンルがあるが、彼女はまさにその典型であったかもしれない。ご冥福を祈りたい。

⑥　田代海香の場合

筆者の娘が夜中にもかかわらず誰かと電話で話していた。ひそひそ声ではあるが静まりかえったリビングから声がもれてくる。さては男か。二十歳を過ぎているから普通のことだろうが、こんな真夜中にけしからん。悪い付き合いをしていなければいいのだが。そう思って耳をすますと会話が聞き取れた。どうやら相手は女のようである。

「心当たりがあるの？」

「……」

「二階の人か。どんな男なの？」

「……」

「えー、海香が出入りするたびにカーテンのすきまからずっと見ていたわけ？　やらしいなあ。頭が白髪混じりならもうおじさんじゃん。エロおやじかもしれない。気を付けた方がいいわ。でも、海香さあ、あんた会社にも変な人がいるって言ってなかった？」

「……」

「やばいよ、やばいよ。海香が捨てたゴミをニヤニヤしながら見ていたなんて変態じゃないの。まさか生理用品なんて捨てないよね。幾つくらいの人？」

「……」

「若いね。早稲田卒のエリートかあ。イケメンなの？」

「……」

「あはは、馬と結婚した方がましかあ。そんなナヨナヨ男な

らやだよね。うちの会社もろくな社員しかいないよ。肩をフケだらけにした部長を筆頭に、平気でおならををしまくる課長がいて、その下に足がめちゃくちゃ臭い係長が続く。弁当なんてみんなの前で食べれたもんじゃないわ。いつも公園か車の中で食べるんだよ。ところで海香さ、盗撮とかされないように気を付けた方がいいかも」

「……」

「制服がミニスカートなの？　今どきあり得なくない。階段とか気を付けなよ。まさか。会社のトイレに隠しカメラなんてあり得ないでしょう。恵庭では有名企業じゃん」

「……」

「どうしたの？　いきなり叫び声をあげて」

「……」

「誰かが南側の窓から覗いてるって？　気のせいじゃないの。このあいだも言っていたよね。でもさ、海香の部屋は三階だよね。南側にはベランダもないはず。そんな高さを覗けるくらい背の高い人間はいないでしょう。せいぜい電線にとまっているカラスくらいだよ」

「……」

「とにかく眠った方がいいよ。私も寝ないといけないし。明日は早出なんだ。新しく来た販売主任が小うるさいやつでさ。数秒でも朝礼に遅れたらイヤミを言うんだから」

「……」

「いいよ、いいよ。あんた実家に住んだ方がいいんじゃないの。千歳から通ったって、たいして遠くないんだし。そこに移って来て半年くらいだよね。帰宅した途端に元カレが電話してきたことあったよね。二、三回あると言ってた。なんで帰宅したのが分かるんだろう」

「……」

「え？　今でもあるっていうの。偶然じゃないかな。だってあんたの元カレは大阪でなかった？　まあ、とにかく寝た方がいいわ。カーテンをちゃんと閉めてね。じゃあおやすみ」

娘は大きなアクビをしてトイレに向かった。向こうの声は聞き取れなかったが、何日かあとにも似たようなことがあった。たまりかねて朝が来たときに聞いてみたが、娘もまいっているという。日中もしょっちゅうラインや電話が来るというのだ。向こうは運転中だったようだが、ずっと誰かに追いかけられているとおびえていたらしい。

もし本当なら警察に相談した方がいいと思うと言うと、娘はさらりと言った。

「あの子は高校時代からそうだった。自意識過剰なところがあって、私は常に誰かに見られている。いや見張られていると口癖みたいに話していたもの。このごろはひどいの。夜中に電話をかけてくるのはまいっちゃう。一種の病気じゃないかしら」

後日談

それから田代海香は何度も警察に駆け込んだという。パ

トカーがときどき見回りに来てくれているらしい。真夜中や仕事中の電話については娘もはっきり断ったようだ。最近、筆者は彼女の写真を見せてもらったが、容姿は普通以下と言っていいくらいで、男性から見つめられて困るといったタイプではなかった。部屋の中に盗聴器がしかけられていると思い込んで専門の業者に調べてもらったそうだが、何も出てこなかった。病理学でいう『注意妄想』というものに該当するかもしれない。それを聞いた筆者は、娘が言うように彼女が実家に帰って、生活を共にする方がいいのではないかと思った。独り暮らしが増えた昨今だが、どうやら向いていない人がいると思うのである。

⑦　桜井政志の場合

この人のことは世間を騒がせたニュースでもあり、仮名を使って書こうかと思ったが、すでに獄中から手記を出版しているわけで、実名を使うことにした。筆者は妄想という観点から事件を分析してみた。桜井がなぜ同窓会でヒ素を混ぜたワインを持参したのか。それによって三人が死亡しているわけだが、どうやら動機の背後には自身の『被毒妄想』があったように思うのである。まずは彼の著書から引用したい。

＊＊＊

俺は、なんであんなことになったのか、自分でもよく分からない。とにかくあのときは、やらなければやられるという一語につきるのだ。ようするに先手を取ってやったのだ。そのことを取り調べの最中に何度も刑事に話したが分かってくれない。Kはイギリスから買って来た最高級のリキュールを一番最後に出すと言っていた。あの中には間違いなく毒が仕込まれていたはずなのだ。あいつの目を見たらすぐに分かった。俺が睨み付けたらすぐに目をそらす。たえず落ち着きなく周囲を見ていたんだ。刑事にそのことを言っても、そんな物を持って来た覚えはないとKはほざいているという。いじめの首謀者だったあいつにこそ天罰が下ればいいのに、他のやつが死んでしまうなんて、それは大きな誤算だった。いずれにしてもクラスのほとんどが俺へのいじめに荷担していたのだから自業自得だ。俺は死刑なんて恐れない。十三階段が何だというんだ。何段あろうがかまうもんか。命を惜しむくらいなら計画を実行する前に電信柱にぶつかって死んだ方がましだ。どうせ人間はすべてが例外なく死ぬのだ。それが遅いか早いかではないか。人間は誰しも生まれたその日から死刑になるのが決まっているのだよ。必ず迎えに来る死に神を撃退できる人間なんていないのだから。俺は一〇年間考え続けた。高校時代に受けた差別や虐待に対する恨みをどうやって晴らしたらいいかを熟考してきたのだよ。給食に意図的に髪の毛を混ぜたり、汚い頭からフケを振りかけたり、ひど

いときは唾や小便を入れられたこともある。俺はまったく食べられなくなってしまった。その後遺症は深刻だった。どこかの食堂に入っても、これは大丈夫だろうかと疑ってしまうのだ。おかげで会社勤めもままならず、出される茶も飲めないわけで、どこで誰が俺に毒をもろうとしているか、ひとりひとりを分析してやった。全員の履歴を調べ、クラスメートの知り合いが潜り込んでいないかを確かめもした。趣味趣向ももれなく調査して、薬剤師や病院関係者が親戚にいる人間にはひときわ警戒を怠らなかった。課長の親は印刷屋だし、部長の親戚には金属メッキの工場をやってる人間がいた。ヒ素や青酸カリ、その他の有害物質を手に入れようと思えばたやすいわけだ。日本画を描く人やペンキ屋が身近にいるやつも怪しい。顔料や塗料には有害なものがたくさんあるからだ。結局は長く勤められなかった。七割の人間が何らかの関わりを持っていたからだ。俺が信じられるのはおふくろだけだった。仕事をやめてひきこもりになってしまったが、おふくろが死んでからは途方に暮れた。俺も親の年金で養われていたからだ。残った少しの金は今年中に底を突く。どうせ飢え死にするなら計画を実行してから自分の人生に幕を引いてやろうと思ったのだ。復讐の機会がちょうといいタイミングでやってきたのだよ。俺は後悔しないぞ。殺られる前に殺ったのだから。生き残ったKや他の連中も俺が書いた本が世間で読まれて恥じ入るに違いない。実名使用はさすがに出版社から止められてしまったが、だいたい誰をさしているかは分かるはずだ。世間からの冷ややかな目を味わうがいい。家族や知人からさげすまれればいい。職場でも屈辱を味わうがいい。しかし覚えておけ。その苦痛は、俺が受けてきた陰湿ないじめがもたらした苦しみの十分の一でしかないことを忘れるな。

後日談

この秋にも桜井の刑は確定する見通しだ。精神鑑定では彼が高校時代に受けたいじめから『被毒妄想』にとりつかれたことの経緯が綿密に調べられているという。当時の学校関係者や学友たちからも証言を得ているようだが、桜井が手記に書いているいじめの幾つかは本当にあったことは裏付けられた。そのことは情状酌量の余地を残すものの、何せ三人も亡くなっているからには、精神鑑定の結果によっては極刑も避けられないのではないかと筆者は思うのである。

手記が出されたことを検察当局はきわめて遺憾なことだと話している。桜井は逮捕される前日の朝に手記を幾つかの出版社に投函していたから、差し止められる前に先手を打ったものと考えられる。こうした周到な計画を考えると、桜井が心神喪失で正常な判断力がなかったという弁護側の主張がひっくりかえされる材料ともなり得るので、ひとつの段落もない特異な文体の手記は大衆の同情を集めると同時に、確信犯という烙印を押される可能性もはらんでいるので諸刃の剣となるだろう。

⑧　田沢莉奈の場合

「ついてる。ついてる。今日は信号が青ばかりだわ。出る前は気が重かったけれど、これはセミナーに行けというサインに違いない」

そうつぶやいて向かったのは博多にある獏(ばく)という喫茶店だった。知識が豊富だから、獏が夢を食べるという架空の生き物なのを知っている。店の名前に付けるとはどういうことなのだろうと、ハンドルを握りながら考えた。夢を食べるということは、私がそこに行けば夢を叶えられるということだろうか。そうに違いないとうなずく。ナビにしたがって行くと角に量販店があり大きな青い看板があった。獏が入っている建物はその近くのはずだ。近くの駐車場に車を停めて歩く。舗道に敷かれたテラコッタを数えながら店の前に来た。

「あら、ちょっきり三十五枚だ。私の年齢じゃないの」

青信号に青い看板、それと敷石の数、まさか階段の段数まで意味があるのではないだろうか。そう思って数えてみたら二十一段だった。自分が短大を卒業して福岡に出て来た年齢と合致することに驚く。喫茶店の木戸の前に立ったとき、田沢莉奈は運命を感じた。

このあとは、本人が友人に送った手紙の一部を紹介したい。許可をもらっているが、さらに詳しいことは田沢莉奈のブログにも載っているから参照なさったらいいだろう。

＊＊＊

私がその日に参加したのは脳科学の見地からポジティブな考え方に自分を誘導して、成功のチャンスをつかむという内容のものだった。会費は安くはなかったが、日ごろからネガティブ思考になりがちだった私には適切なアドバイスが得られるかもしれないと思った。参加者は十名ほどで年齢はさまざまだった。それぞれが住所氏名を記録したあと自由に席についた。

そのとき私のハートをわしづかみにしたのが講師をしていた小日向真二郎というアメリカ帰りのイケメンで、グレーの髪を少しひたいに垂らし、ノンフレームの眼鏡からは知的な眼差しを向けるさまが魅力的だった。プログラムにはハーバード大学卒で、臨床心理学の博士号を持っているという。歳は私よりちょうど十歳上で、落ち着いた話し方や完璧に着こなしたスーツ姿で語りかけてくるのが何とも気持がよかった。

私は真剣にメモして、短大時代に戻ったみたいに耳を傾けた。講義が終わったあとはテーブルを囲んで希望者だけの質疑応答の時間となった。数名は帰っていったが、私はまだ聞いていたかったので空いている席に腰をおろしたが、なんと真向かいに小日向真二郎が座ったときは心臓が高鳴った。彼の伸ばした足が私の足に触れそうな距離だ。すぐに思ったのは、やはりここに今日来たのは運命なのだという感覚だった。

講師はひとりひとりにアイコンタクトしながら脳がいかに錯覚を起こしやすいかを面白おかしく語った。だからこそ、思考というものは同じ条件のもとでもポジティブにもなればネガティブにもなり得るというわけだ。若いころに大病を患って学校に行けなくなり、その間はびっしり本を読むことになって、そのおかげで作家になれた人が何人もいること。ケガをして野球をやめた人が絵を描き始めて驚くほどの才能を開花させたこと。若い頃から妹や弟たちに食べさせるために母親代わりで苦労した人が優れた料理人になったこと。実名をあげながら講師はどんな状況下でも考え方しだいで後ろ向きの考えから脱却できるのだと教えてくれた。私が聞いていて驚いたのは、出て来た三人の名前だった。全員が私のかねがね憧れていた人ばかりだったからだ。そのことも偶然とは思えなかった。

聞くと、こうしたセミナーを各地で開いているという。終わりが近づいたころ、店の片隅にあるピアノが美しい戦慄を奏で始めた。店に来ている客の中の誰かのようだった。弾き語りで歌いだしたが、その歌詞に私はまたまた運命的なものを感じた。――あの日の海は二人のために輝き　あの日の山は二人のためにそびえてた。あの日のすべてが二人のために。

帰宅してからも講師のことが頭から離れなかった。すると着信があり、なんと、たったいま想っていた人からだったのだ。セミナー会場で連絡先を書いてきたからだろう。そこには来てくれたことへの感謝と、興味があるなら引き続き喜んで知っていることを分かち合いたいという内容だった。私はすぐに返信した。ぜひ、お願いします。いろいろ教えていただきたいですと言ってしまったのだ。

そのあとのことは近々のうちに出版される本を読んでほしい。小日向真二郎が偽名であり、ハーバード大学卒というのも真っ赤な嘘で、セミナーの講師料で暮らしていただけでなく、そこに来る多数の女たちに近づいて巧みに金銭を吐き出させたかが書かれている。私も贅沢ひとつしないで貯めていた一五〇〇万を根こそぎ持っていかれた。今はタイに逃亡しているらしいが、そのうち捕まるだろう。恥ずかしい話だが、私もやられたら黙ってはいないタイプなので、それをネタにしてやろうと想っている。私がおちいった『関係妄想』というやつが、いかに思い込みと、ときに誤った判断に人を導くことがあるかを伝えたい。

後日談

現在、彼女は有名なユーチューバーとなって自身の体験を公表している。近々のうちに東京の出版社から本を出すというから、同じ執筆にたずさわる人間としては安堵と同時に羨望を感じるものである。ブログのフォロアーも一五〇万人以上いるというから、ベストセラーになるのは間違いないだろう。彼女がおちいった『関係妄想』が、思わぬ悲劇と、これまた予期しない幸運をもたらすとは、まさに人間万事塞翁が馬というやつだろう。

出版記念会には筆者も出席しようと思っている。本の題名も決まっているらしい。それが何ということか。『妄想日記』というらしい。筆者が書いているのと同じ題名だ。もしかしたら田沢莉奈とは運命的なつながりでもあるのだろうか。聞くと誕生日が同じらしい。これは何かありそうだ。このごろは彼女が発信するものを見ないではいられない。その語り口が素晴らしい。まるで自分にだけ話しかけてくるようだ。その透明な眼差しに引き寄せられる。こんな子を恋人に持ったら素晴らしいだろう。出版記念会で知り合って名刺を交換しよう。うまく会話を交わせたらさりげなく言おう。「ジャーナリズムにたずさわる者として協力できることは何でもしましょう」「え？　よろしいんですか。本当にお願いしちゃいますよ」「いいですとも、よかったらこのあと食事でもしませんか」「まあ、嬉しい」さあ、そのあとはどうなる。どうにも妄想が止まらないのである。

⑨　高浜慎太郎（筆者）の場合

一月十五日

とんでもない集団が現れたものだ。我が家もセキュリティ対策をとらないとならない。日本中で同時多発的に強盗事件が起こるなんて世も末だ。しかも海外から指示が出されているという。ネット社会が生み出した闇バイトなるものが日本中を震え上がらせている。すでに八人が殺されている。品川では家族三人が皆殺しにされ、家中から現金や貴金属が持ち去られた。福岡では老人が二人殺され、自宅に保管していた現金が根こそぎ強奪された。札幌でも同様の事件が三件起きている。俺も万全の備えをしてやろう。

一月十六日

今日はガラスを割られないようにする防犯フィルムと木刀三本、それに草刈り鎌を同じ数だけ購入した。それを三つの部屋に置くのだ。奴らはいきなり入ってくる。どこにいても素早く反撃してやろう。向こうの出方によっては滅多切りにしてやる。れっきとした正当防衛だ。少しくらい刑務所に入ったってかまうものか。奴らにみすみす殺されるよりはましだ。

一月十七日

夢をみた。東南アジア系の外国人が十人くらい部屋にいた。何かの手続きで並んでいたのかもしれない。その中に足の悪い人がいて手を貸してやった。でも、それはワナのようだった。その男が合図して四、五人の男たちにはがいじめにされた。「私の父親はポリスだ」と英語でウソをついたがまったく効果はなく、左手の上腕部に注射を打たれた。たぶん麻薬だろう。まだ意識がはっきりしているときに目が覚めた。

一月十八日

また陰惨な事件が起きた。仙台で真っ昼間に強盗事件が立て続けに三件起きたのだ。二人が殺された。奴らは音も出さずにガラスを破る方法を知っているらしい。防犯フィルムも役に立たないらしい。恐ろしいことだ。ああ、何だ！　空耳だろうか。うちのガラスを叩く音がする。風なのか。こうなったら眠るものか。ずっと起きていて見張ってやる。庭に少しでも怪しい影がないか、けっして見落とさないぞ。

一月二十一日

ああ、書けない。割り当てられているコラムの締め切りが明日だというのに夜になっても一行も進まないのだ。誰だ、ドアを叩くやつは――。出ると宅配だった。ドアの外に置いていけと言ってやった。郵便受けから伝票をもらってサインした。荷物は明るくなってから中に入れたらいい。マンションの廊下は雨もあたらないのだから。それまで絶対にドアを開けるものか。俺のやりかたが気に入らないのか、妻は娘の家に行ってしまった。勝手にしろ。娘の家にいたって安全とは限らないぞ。

一月二十八日

今日は俺の誕生日だが、油断するものか。誰かからの贈り物ですとか何とか言って訪ねて来るやつがいても、その手に乗るものか。お？　誰かの声がする。さては奴らが来たのか。俺はすばやく照明を消して身構えた。右手にバットを握り、左手には草刈り鎌を持った。最初はバットで殴りつけてやろう。それでも逃げていかないなら鋭い刃を覚悟するがいい。血しぶきが飛ぶだろうが仕方がない。自分の身は自分で守らねばならないのだ。おー、来やがった。ドアをこじ開けやがったな。これでもくらえ。

後日談

私はあやうく娘と妻を殴り殺すところだった。誕生日なのでケーキを持って来たという。電話をすると来るなと言われそうなので黙って来たというわけだ。バットをふりおろしたとき、私は十日近い睡眠不足のせいで足もとがふらついた。先に入って来た娘はバスケットの選手だったせいで素早く身をかわした。それたバットは壁を傷つけたが、本当に危ないところだった。マンションの住人が何人か大声に驚いて出て来たという。妻がうまく話してくれたからいいようなものの、私は家族殺しという取り返しのできない犯罪をしでかすところだった。そのとき、妄想について書くのはもうやめようと思った。田沢莉奈の出版記念会にも行かない。でも彼女のユーチューブやブログはこれからも読ませてもらうつもりだ。物書きといえども押しのひとつくらいあってもいいだろう。

完